

# 自治会各部の発展

## 文化部

### 生物研究部

現在の生物研究部は昭和十七年四月、声中華友会科学研究部の一班として発足、文化部の中でも最も古い伝統を誇る部の一つに数えられている。当時、中学三年生遊鴻儒、和田宏両君を中心として十数名の班員により結成され、福田先生指導の下、蛙の発生の研究等に重点がおかれて、その活躍ぶりは実に目ざましいものがあつた。

しかし次第に勤勞動員が強化されるに従つて校内活動も全く圧迫せられ、折角の班活動も中止せざるを得なくなつた。

終戦後、一時の混乱から次第に平常に復するに從い、以前に築かれた生物班の土台は、新しい飛躍への基礎となり、二十一年には、最も活潑な活動をした部として、校内に大い

に認められるに至つた。竹内、寺沢、富所三君を中心として完全なチームワークのとれた活動が、今日の生物研究部の基礎を作つたといつて決して過言ではないであらう。福田先生の特別講義、トマトの四倍体作成、ドジョウの人工孵化の実験等、なかなしく秋の第一回文化祭における文化部展覧会では大いに異彩を放つた。

二十二年。現在の校舎に落着くことが出来たので、実験設備もずいぶんと完備せられた。始めて部の機関誌「ガマ」が発刊され、また採集、見学等も数多く実施され、その他校との意見交換、中学生物連盟への加入等、対外的にもその活動範囲が広がられた。

二十三年。県三との合併により部員数も三十余名となり、その活躍は見るべきものがあつたが、特に文化祭における「日光と動植物」の題目の下に行われた展覧発表は大いに注目を浴びた。

二十四年。千速、永田両先生を新しく迎え、主に採集、見学等に重点がおかれたが、文化祭等余り芳しくない結果に終つてしまつた。

二十五年。部員数三十名を越え、例会の都度、各自の研究発表など内部充実が力が入



校門風景 金井 諭子(九回生)

られる一方、ベニシリン工場等の見学により、大いに知識の拡充に務めると共に、また阪神学生生物研究会にもこの年加盟した。

二十六年。中村(邦)先生を中心として掛図の製作整備に力が入れられ、またニワトリの卵の人工孵化等もなされた。展示会にこの年は、比較解剖が主なテーマとされ、人気を集めた。

二十七年。千速先生御病氣となられ、その上一年生部員皆無といった有様に、全く部活動は一時苦境に立ち入ってしまった。而し福田先生指導の下、動物、植物、微生物の各班に分けられ、標本作成に重点がおかれた。

二十八年。新しく土井先生を顧問として迎え、新実験室落成と共に山野上君を中心にした部の活躍は大いに期待されたが、部内のチームワークに欠ける点あり、折角の一部の人員の努力にも拘らず、その成果はあまりあがつていかなかったようである。南校舎空地に飼育池完成、また内部充実という理由でこの年、阪神生物研究会脱会。

二十九年。梅原、梅沢両君を中心として部員二十余名、しかし前年と同様幹事連の独り舞台の感じがしたのは惜しまれる。文化祭には中学校昆虫採集展示もなされたが、なかで

もサボテンの展示即売会は多大の好評をうけた。なお数年來中絶していた機関誌は「根」と改称して新しく発行された。

三十年。島田君を幹事として、目下二十余名の部員、主にプランクトン採集などに力が注がれつつある。

以上十幾年の部史をひもどくには、少し簡単すぎた嫌いもあるが、といつて書き立てればきりが無い。いずれにしろ部の発足当時の活潑な活動に比べ、最近沈滞気味に思われるのは残念なことである。しかしそれも部の歴史において当然起りうる一つの現象かも知れ

ない。現在の部員もこの点について、色々と考えており、必ずや近いうちに、また活潑な部として活動を始めることであらう。

## 弁論部

(楡垣)

新生日本は、まず言論と政治からはじまつたとするならば、かかる一般的風潮はこの学園を決してその例外とはしなかつた。事実、弁論部の発足は最も早く他の数部と共に昭和二十一年四月部を創立している。元來弁論部には所謂「やり手」が多く出て文化部はもとより、広く自治会全般の指導運営にも貢献するところ多大であつたといわなくてはならぬ。さて弁論部十年の歴史は、丁度これを裏二つに分けて前期(草創時代)後期(整備時代)と劃すると最もよくその発展の相を説むことができよう。

いま草創時代を顧みると、終戦直後の混沌たる中から弁論部が頭角をあらわすに至つたことには生徒の盛上りと共に岡本顧問の指導を見落すこ



とができない。それらについては既に詳述されてあるが(校友会各部の胎動)二十一年三月十六日に第一回校内弁論大会を本山第一小学校講堂で開き、この年五月の校友会新発足記念大会にも、秋の文化祭にも弁論大会が催の中に大きな位置を占めていた。秋には弁論部主催で芦中模擬国会を行い、二十二年に入って弁論部機関誌「論窓」が創刊された。(これは以後第三巻まで刊行された。)かくしてこの一ケ年は川越幹事のもとに部の体制が整備された。

ついで二十二年度は漸く外部発表をはじめ四月には県三高女総務部と座談会をもち学生々活に関する諸問題がとりあげられた。また十月には尼商、伊中、関学、甲陽、西商、鳴中によびかけ、阪神地区中等学校弁論連盟を結成した。このころ内外共に討論会がはじめられ、外部では神戸経済大学主催で兵庫県下中等学校討論会が開かれ、優勝戦で「学内におけるダンス教育の是非」の肯定として姫中と対戦五八対五五で惜敗。この年秋の文化祭にシュプレッヒコール「新しい学校」を上演、昨年の「日本国憲法」について、シュプレッヒコールを伝統行事となさんとする動きがあった。



シュプレッヒ・コール「新しい学校」

二十三、四年度は、内部充実をはかると共に、最も外部発表の華やかな年であった。当時活躍の弁士を拾ってみると、岸本昌弘、藤岡栄、石崎守男、佐脇一郎、三村秀夫、外山豊和、八木三千雄、大江茶治、松井秀夫、荒木道美等である。これら弁士の優勝だけ挙げると次の通りである。

○二年十一月八日 全関西大会(甲陽高校)

What should I be? 岸本 昌弘

○三年二月十一日 阪神弁論連盟大会

「自由の小鳥」 石崎 守男

○四年六月二十七日 阪神弁論連盟大会

「学園自治について」 岸本 昌弘

○同 十月十五日 全兵庫大会(関学)

「真の教育とは」 岸本 昌弘

○同 十一月十三日 全国大会(八尾高校)

「自治とは最も楽しい精神生活である」 岸本 昌弘

○同 十一月二十日 全関西大会(今宮高校)

「理性と欲望との争い」 岸本 昌弘

○同 十一月二十日 全関西大会(湊高校)

「理性の勝利」 岸本 昌弘

○同 十一月二十一日 全国大会(神愛高校)

「理性の勝利」 岸本 昌弘

昭和二十五年以後の後期(整備時代)については既に一部述べたが(全国高校優勝弁論大会)かかる本校の主催する行事の整備と共に、つねに部員を刺激してその幻ともなったものは草創時代、殊に昭和二十三、四年の盛時を再来させようとする努力であった。昭和二十七年に入り、神戸大学主催の討論会に出席して優勝し、昭和二十二、三年の惜敗によく報いた。このころ活躍した弁士には山村

耕造(早大の全国大会第三位)徳矢典子(龍谷大学の全兵庫大会第二位)等があり、向この年度長田吉弘が中部日本大会(飯田高松高校)で優勝した。昭和二十八年に入って大隅孝二(飯田高松高校)全国大会第三位、平成子(松山東高校)西日本大会一特賞第二位(鈴木行成(三木高校)県下大会第二位)があげられる。昭和二十九年には平成子(早大)全国大会第二位、鈴木行成(市立伊丹高校)全関西第三位)の活躍がみられる。

最後に芦高弁論部の気風を物語る弁論ブワキ節(岡本仁作詞)を示そう。

- 一、ひらけゆく世に 弁論は
- 世界文化の 華と咲く
- 二、書よむ窓に 創造と
- 真理の月が 牙ゆるかな
- 三、民主学園 建設の
- 雄鷲を共に 握らばや
- 四、よこしまくだけ 弱きをば
- 助けて正義の 道を行く
- 五、石に立つ矢の ためしあり
- 舌端火をはき 雲を呼ぶ
- 六、昔ギリシヤに 獅子吼せし
- デモステネスも なんのその
- 七、鳴くホトギス 血を吐かん

若人の叫び 火を吐かん  
八、やがて学窓 興立つとも  
弁論部員に 幸多し  
九、ここは六甲 白雲の  
なびくふもと 吾が母校  
十、とはに平和と 文明を  
守る芦中 弁論部

### 音楽部

文化部中最も多くの人員を持つ音楽部は、声楽、器楽、理論の各部門にわたり、年毎に部員の増加、内容の充実により一層の発展を遂げてきている。本年度、声楽部においては、男生徒の部員もふえ、各声部のバランスもとれるようになり、張りのある立派なものになりつつあり、来る記念祭音楽会、毎日、朝日両コンクールを目指して、連日猛練習を続けている。また、器楽部においては、昭和二十七年六月に、芦高管絃楽団を編成し、他の高等学校に見られない管絃楽の演奏会を催し、好評を博している。更に、一昨年には、ブラスバンドが組織され、昨年の記念祭には、メンバーの充実と共に、楽器も一通り揃い、音楽会に、運動会の大行進に、大いに活躍してきている。理論部においても、本年度

は、更に活潑な動きをみせ、定期的にレコードコンサートを催す一方近代音楽についての研究をはじめている。このように発展するに至った芦高音楽部の歴史をかえりみよう。

昭和二十一年、第三回生の有志間において、はじめて音楽部の形がとられ、着々その内容を固めた。昭和二十一年文化祭には音楽部はクリークラブと共に活躍した。

昭和二十二年、音楽研究班と称して、合唱、器楽、鑑賞の三部門に分れ、それぞれ精勵し、十月に入って、毎日主催の音楽コンクールに、四、五年の有志を募って、コーラス団を結成、出場し、これを契機として合唱部はまとまりをみせ、将来の発展を期待された。

秋の文化祭には、器楽の発表も行われた。

昭和二十三年、池尻先生が顧問として異常な熱意をもって指導され、また女生徒の合流により、混声合唱「ハレルヤ」を演奏する等、一段の飛躍を遂げた。また理論部を設け理論、作曲等が行われ、またレコードコンサート等、充実した部となった。文化祭には、合唱面に著しい進展ぶりをみせた。更に十一月には、音楽部研究発表会を開催、新発足した。スクールオーケストラの演奏等、多彩な

催しであった。

昭和二十四年から二十五年にかけて、一層の充実した発達を示した。特に、器楽部は、名ばかりのものであったが、一応形を整えるに至った。そして、記念祭には、前夜祭のフオークダンスの伴奏、体育祭の音楽、独立した音楽会を開催する等、今までに見られない出来栄を示した。

昭和二十六年、音楽部の活躍がますます、基礎の充実、内的発展に努力の結果、毎日主催全国音楽コンクール合唱部に出場、参加四十余校の中、見事予選を通過し、輝かしい成果をおさめた。

昭和二十七年六月、芦高管絃楽団演奏会が催され、絃楽部員の充実により、今までみられない、すつきりした演奏に好評を博した。

昭和二十八年、記念祭を中心に、その他の対外的面とも出来る限り、多く出場し、各部共、日頃のたゆまぬ努力により、漸次、充実したものへ向っている。十一月種道小学校で行われた兵庫県コンクールに音楽部は第二位という輝かしい地位を獲得した。

昭和二十九年十月朔日放送にて女声合唱を放送、絶讃を博した。

このように、先輩諸君の並々な努力に

よって、築きあげられた今日の音楽部の発展を思ふ時、一層の精進を期待してやまない次第である。(出口)

### E・S・S

伝統をほこるこのクラブは終戦の翌年――

昭和二十一年度――に発足した文化部の一つである。創設当初よりその活躍は目ざましく、二十二年秋の文化祭にはシエークスビヤ「ジュリアス・シーザー」を演じ、当時、兵庫軍政部に勤務していたハットン少佐一家を招待し、好評を博している。(当時の芦中新聞に同少佐の賞讃の手紙が掲載されている)この賞讃に気をよくしてか二十三年度「ハムレット」二十四年度「ロメオとジュリエット」二十五年度「真夏の夜の夢」と、その後を引続き記念祭にはシエークスビヤの大作にとっ組んでるあたりその意欲の程が窺える。

創部当初よりC・I・Eライブラリーを訪れたり、外人を招待したり、外部との交流も旺んであった。二十三年六月には当時の姉妹校ともいふべき御影高校E・S・Sとの交歓会をもち、女子メンバーを獲得している。そ

の夏にはサマー・コースを低学年生を対象に用いていることも注目値する。二十五年には千葉先生を顧問にストウ夫人「アングル・トムズケビン」を輪読したり、近郊の米人子弟を学校に招じ部員が日本の物語を英語で語って聞かせ、スピーキングの練習をつむなど新しいメソッドを試みている。またE・S・S機関紙Speaker Toneを創刊しているのもこの年度である。

二十六年春には既に前述の如く、中島、中園、高馬等の初期のバイオニヤ達によって確固たる基礎が築かれていた。そこでこの年は多彩な活動の年であった。六甲ハイツの外人家庭訪問、英語雑誌の輪読、英作文批評会第一回校内英語弁論大会等々、文化祭にはこの年ほじめて慣例を破り、古典劇とは趣を異にしたA Lodging For Night というミンジッピの洪水の際のエピソードを扱ったアメリカ現代劇を、豊辺の演出により公演した。この劇のキャストは全員新入生ばかりであったと記憶している。また文化祭の展覧会にE・S・Sの展示会場を獲得したことも例年と違った点であった。

二十七年度も前年に劣らず活潑な年であった。文化祭には喜劇The Doctor in spite

of himself を演じ好評であった。しかし、この年度の最大の収穫として特筆すべきは村岡ら本校E・S・S部員の発案により阪神間E・S・S連盟が結成されたことである。

台風被害を受け、そのため種道小学校の講堂を借りて行った二十八年度文化祭には

Barrie の喜劇 Admirable Crichton をもって日常活動の一端を公開した。その批評も admirable であったといいたい。第三回校内英語弁論大会には一位から五位までに全部E・S・S部員が入賞したことも平常の努力の賜であらう。

二十九年度は校内では英語弁論大会に代りレクチャー・コンテスト(暗誦大会)を主催したが、この最初の試みは成功した。対外的にもその活躍は目ざましく殿山、佐々木等のコンテスト入学の記録がそれを雄弁に物語っている。文化祭には「リップ・ヴァン・ウインクル」を好演し、高校における英語劇の脚本難の折から、一つのありかたを示すものとして注目された。

本年度は素質のある部員に恵まれ、昨年のしのご成果をあげるべく張切っている。一学期中に参加した三度のコンテストに、既に四

名が入賞しているという好成绩もそれを実証している。八月上旬、甲南大学で催されたユニオン主催のサマー・コースへの参加も得難き経験であった。あと旬日に迫った記念祭には、高月の脚色によるオールコット「若草物語」を公表する予定で現在猛練習のさなかである。クイーンの治世下に英帝国は発展していったかといふが、E・S・S初の女性幹事高月幸子の適切な指導による成果を期待している。(古川)

### 文芸部

昭和二十一年四月当時の芦屋中学校三年生の吉田邦男、市居純治が文芸部の創設を申入れた。そして文芸部に集まった諸君等の手で二十一年九月文芸部の機関誌「花火」が創刊

された。「花火」の誌名もその当時の文芸部の部員等が相談し総ての人の意見で今の「花火」の誌名が出来た。当時の三年生の諸君が中心として幹事に吉田邦男がなり顧問として奈谷先生があたりられた。その当時の部員等は、その翌年も引き続きその作品の創作活動、文芸研究に練磨されていった。

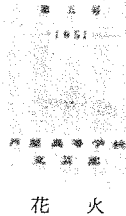
文芸部創設当時の諸君等が何を考え、何をなやみ、自己監視をどこまでしていたか、あの当時の世相の中にあつて、求めんとするものを自己発想の場として文芸部を創り出した事だったのであらう。

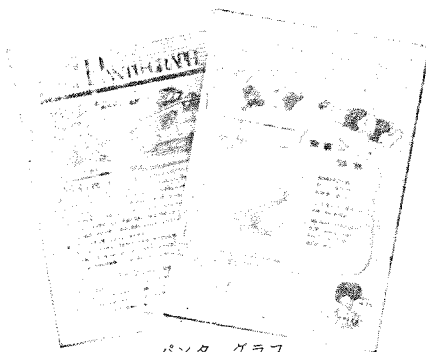
二十二年も続いて吉田邦男の幹事で文芸部は動いた。部員も昨年度と同様のメンバーで進歩の跡を示しつつ発展していった。

二十三年に入り文芸部員も急にその部員数を増した。幹事は森本政利になった。この年文化祭の演劇に「三年寝太郎」(木下順二作) (午後三時(吉井勇作))を演じた。部員数の多いことで出来たのかも知れない。浜田芳樹井床富男が幹事を扶けた。

二十四年当時高校三年の三船清が幹事になった。二十五年になって文芸部は部員も大世帯となり、その活躍もはなやかになった。三年生の宅見晴海が文化部長を兼ねよく指導し

# 花火





パンタグラフ

全国高校文化部において全く珍しい鉄道研究会が、芦高文化部に誕生してから早くも十年、ここに本会の創設から今日までの発展の輝かしい努力の跡を回顧してみよう。

今から十年前、芦高が未だ芦屋中学の頃、

### 鐵道研究部

土田敦子らがよくその作品にうま味を加えてくれる寒を望んでもいる。(井上徹)

た。橋本満、岡田洋一、藤井一美、中島敏、中西信夫、吉田尚子等の部員一体の活躍もその質、量においても他部を圧した。女子生徒も加えてなどやかにその活躍がなされ、例えも何時も活気あるものとして進められていた。秋の文化祭にも二十三年に引き続いて二本演じた。「商船テナシティ」「寒鴨」(真船豊作)。「世界の名作」商船テナシティ」を演ずる事のむづかさをのり人間を学び、文芸を愛する喜びを得ていった。

二十六年、昨年より引き続いて活躍した井本太郎が文化部長を兼ね、幹事として活躍した。中野順一がよく長篇をものし、春山珠子もその作品の中に自分をよく表現していた。

二十七年、伊藤衛が幹事を継ぎ少なくなった部員を指導し、自身もよく作品をものした。その年より本谷先生より井上顧問を引き継いだ。

二十八年五月、当時の三年生に復学した一坂俊丸が組の同好者、学年の有志を集めて「かたつむり」を出したのが現在季刊の「かたつむり」の姿であった。三十頁ばかりのガリ版の、生徒達の手で表装されたこの一冊子に一坂の意欲がそのままにじみ出た。その号数が増すにつれて、作品も意欲もその当時の激

しさより退歩したことはない事でもあった。がその後の委員達は「かたつむり」を当時の同好者の姿から文芸部の人達のものとし、それによって自己発想をこころみた事は、その作品の質、量の如何を問わずに、何時か文芸部の人達の雑誌として発達して来た。

一坂が三年生になった年、入部者を集め自己の抱負を語ったが、新入生にとって新たな意欲となり、その年の活躍が始まった。第二回目の例会に個人的に作品を手がけるが部員間の親睦、発展のない弊を読書会の形式に打開をこころみんと、芥川の「鼻」をとらえて輪読会を行った。どんな事を語ったかすかり忘れてしまったが、新入生にとって如何に上級生が偉そうに見えたかは、当時の一年生の山本安美が上級生の人達の話にはついて行けそりもない事を語っていた。しかしこの形式の例会がその年二度行われた。今年三十年になってからも「かたつむり」の相互批評会を開き、部員の互の修練の場としてこうい形式の会合が開かれた。その年の秋、文芸部の催しとして「文芸を聞く会」として本谷先生よりお話をしてもらった。その会の後、当時のはやりの文芸的なクイズを行

三回生の池田和政、余田昌芳、北山良雄、三君の大変な鐵道マニアが相談して、終戦の昭和二十年十一月に鐵道研究会を創設し、同好者を募ったのが本会のそもその発端で芦高文化部内でも、最も古い部類に属している。終戦時の虚脱状態にあった芦中生は、多数の会に入会し一時、会員は二百名を超えた。これに気を固くして三人の創設者は、実に熱心に活動を始め、本校の校友会では最初に雑誌「パンタグラフ」第一号が翌年春の四月五日に発行された。

創設の翌二十一年四月、芦中校友会の正式発足に際しては会談の席上種々議論のあった末、創設者の希望通り、科学研究部とは別に独立した正式の部と認められ、予算百円(当時最低)を割り当てられ、顧問には岡本仁先生になって戴き、幹事池田和政で発足したのである。

ところがこの昭和二十一年六月までに、本会生みの親、池田、余田等が卒業したので当時の職員や、校友会の各部では、これによって鉄研も長くもたない生命と思つたものだったが、なかなかどうして栗田(二代幹事)上田雄(三代幹事)の根強い後継者が現われ活動を一層発展させていった。即ち六月に第

つた。

二十八年の活躍も文化祭の終了後、荒木潤駒子が引き継いだ、生徒会長の石本太郎がそれを扶け、中心的に活躍した。二十八年に放送部が神戸放送より学校放送として電波に流した。放送劇の台本を一坂が書いた事を誌しておく。一坂をよく扶けたのが、新聞をやっていた北村皓一が盛になり、日当になっていった。

二十九年の活躍は、詩を中心として行われた。幹事の作った詩をこびりどくさした事もあった。一学期に、二学期に詩は次第にうまく行つた。作品の中より感傷をぬき去り、エスプリを求めた事を憶えている。石本の作品にも、うまさ夏休みを境として見えはじめ、荒木潤も特有の柔かさが加わって来た。

三十年に入り前年より引き続き活躍した、山本が幹事として毎日の例会その他の世話を始め、下級生の指導にもあたった。一方、作品を次々と書いて批評を求めに来た。雑誌「かたつむり」を一学期に批評会を行い、創作のあり方についてひどい批評をした事もあった。二学期文芸部の総結集ともいふべき「火花」へと、夫々想を練っていることと思う。

二号誌発行、七月に第一回見学会(近鉄高安車庫)を開催し、八月には会報「テッド・ニュース」の発行を始めた。(これはその後各月発行し、二十五年六月発行の第三十二号をもって終り、会誌「パンタグラフ」に発展的に吸収された)そうして、その年の秋の第一回文化祭には、本山の借校舎に於いて第一回の展覧会、模型鉄道運転会をささやかながら開催し、会誌「パンタグラフ」は次々と発行され、その年度中に五号を数えた。翌二十二年一月には山電技術部長、亀井一男氏を囲んでの座談会を、三月には大阪鉄道局鐵道相談所長、畑中氏、芦屋駅長、本山駅長を囲んでの第二回座談会を開催する等、広く活動を展開し「芦屋鐵道会」といって有名になるまで対外的な活動が押し進められていった。

しかしこの目ざましい発展の陰には経済的な苦しみ、校舎分散のため、活動が意にまかせないといった創生期の難問と悪条件を克服していった会員諸士の、並々な努力のあった事を明記しなければならぬ。しかもこの間の活動は、芦高新聞にも指摘してある通り本会の特殊な性格から殆ど顧問の先生の力を借りず、生徒自らの力と、努力でなされたのであるから、その活動は大いに讃えられて然

るべきであらう。しかし顧問も無用の長物であつた訳でなく、岡本先生、友成先生(二代顧問)の理解ある精神的な助言と、助力も陰の力として鉄路を予想でない。

かかして錯れるべきでない。潰れるどころか着々と基礎が形作られ、昭和二十五年頃には、全国の高校中でも極めて特異な稀に見る存在として確固たる地位を形作り、昭和二十五年、及び二十六年の二ヶ年に亘つて長期計画で作られた芦高鉄道は、当時の会員の大変な努力によつて、延長五十米にも及ぶもので、わが国でも有数の模型鉄道であり、毎年の文化祭にはなくてはならぬ名物になつてしまつた。

以来、毎年文化祭には名物の芦高鉄道運転は続けられ、今秋で第十回目を迎えようとしてゐるのであるが、最初は机を並べ、その上に町の模型屋に売つてゐるブリキ製のガレールを並べ、その上を五、六輦の電車が走つてゐたのだが、年を追つて先輩や会員の熱心な努力によつて車輛の心配はなくなり、レールも錆びてしまつたガレールから真鍮製のレールに取替えられ、道床も木材で作り、枕木(模型ではボール紙ではあるが)も取りつけられ、延長実に九十米という、正に日本一

を誇る芦高鉄道が完成し、五輦編成の芦高電車が走り、色とりどりの電車が出現するに及んで、芦高鉄道は頂点に達した。しかし今日この頃、三線式レイアウト(模型電車)は余りにも一般化し、一部では既に二線式に変更してゐる所もあり、見た目にも感じがよく、実感味も豊かなので、本会でも昭和三十年の文化祭を芦高鉄道開設十周年記念として、今年から二線式に変更するに至つたのである。

また発足当時から現在に至るまで継続されてきた会誌「パンタグラフ」も本年九月発行をもつて第五十三号を数える。各電車庫見学並びに車輛メーカー等の見学も地元の阪急、阪神はもとより京阪神地方の殆どは見学し、数度も見学する所も出てきたので、「未開の地に見聞を広めよう」との声が現われ、ここに鉄研の中に旅行クラブが発足し、これと同時に自動車クラブも発足した。旅行クラブは昭和二十七年には北丹後地方、昭和二十八年には信州地方、二十九年には山陽・山陰を一周し、今年三十年には旅行マニヤのあこがれの的であり、また痛である紀伊半島一周プランが立てられたが、都合で中止となつた。自動車クラブも今の所はバツトしないが将来充分期待できる。

以上が鉄道研究会が発足してから今日までの概略であるが、かつて文化祭におけるお客様であつた卒業生の幾人が、鉄研におかれて芦高に入学会し、現在芦高鉄道運営の主要メンバールとなつて活躍してゐる事を思ふ時、十年に及ぶ鉄研の輝かしい発展の歴史を顧みて、その発展の成果を祝福すると共に、種々の苦難を征服して今日をあらゆる先賢諸士精神的な助力を惜しまれなかつた顧問の先生方に敬意を表したい。今後その伝統を生かし、常に芦高鉄道研究会は発展を続けるであらう。

最後に歴代の顧問の先生方と、幹事の氏名を記して参考に供したい。「顧問」一代、岡本仁先生、二代、友成才先生、三代、津田実先生、四代、野間稔「幹事」(一)池田和政、(二)栗田公和、(三)上田雄、(四)池田博、(五)井上文雄、(六)古屋恭一、(七)伊藤実、(八)志水淳、(九)中本一弘、(十)小松孝 (野間)

## 写真部

創設は終戦直後、芦中三生による、昭和二十一年秋で、第一回文化祭には小規模ながら展覧会を開催してゐる。

二十二年度になると、校友会各部の活動状

況・記念撮影等も行つて発展し、殊に『あしぶえ』創刊号表紙の写真で、部員より提供してゐることは特筆すべきものである。然しながら当時は学校に暗室なく、塾い校外での活動が主となり、個人の家でグループ的に行われてゐた。しかも当時、一般家庭に停電多く、ために無停電地区となつてゐた山手小学校の暗室を借用に行つたこともある苦難時代であつた。

二十三年度に至り、校内活動も写真理論の研究会を隔週開くまで発展してきたが、更に中箱が建設され、東階段下に暗室が設備されるに至り、始めて具体的活動期に入つたのである。ところが、この第一代暗室は、現在の掃除具置場にて、床面積半坪足らず、立てば頭がつかえ、電気は来ていたが、水はバケツで持ち込む始末、誰かが階段を昇降する時は振動のため作業を中止せざるを得ない、という惨たるものであつた。しかしながら始めて与えられた暗室なれば、部員一同大いに喜び、器具、薬品等購入して作業に入つたのである。記念祭に、部員撮影による体育祭フィルムを徹宵引伸して展覧会に陳列する等のことも、この年度から始まつたのである。

二十四年度も前年度に引続き、記念祭に活

躍する外、小規模ながら撮影会も数回行い、またしばしば作品批評会を行つた。

二十五年度に至り、その部活動も大きく飛躍発展した。即ち著名な写真家であるハナヤ勲兵衛氏の技術指導下、校内撮影会、作品批評会、技術研究会を数度催し、また夏季に六甲撮影ハイイクを行つて、部員の技術向上に努め、記念祭には、体育祭のみならず音楽会・弁論大会の撮影も行い、また市立西宮高校の文化祭にも小教出品するまでに至つた。従つて暗室の不備が痛感され市内写真屋の暗室を生徒個人として借用するのが多くなつたのである。

二十六年度になると、当初に物理実験室の東端に、光学実験室及び暗室が設置され、写真部にも使用が許可された。この第二代暗室は床面積二坪半あり、本格設備で優秀なものであつた。部活動範囲も増大し、校内では撮影会・批評会・研究会の外、進学適性検査用写真の撮影も行い、記念祭には望遠レンズも使用した。展覧会には写真に各種の賞を作りまた千代田光学の光学工業参考品の陳列も得た。校外活動では、春季の舞子撮影会、初夏の毎日新聞社写真室見学、夏季休暇に鳥取砂丘撮影旅行を行つてゐる。また関西学生写真

連盟で高校部設置案が採用されたのにも、また阪神高校写真連盟の結成母体成立にも、本校写真部の努力が大きくあつてゐる。

二十七年度は、承前の校内活動の外、校外撮影会として、春に六甲、夏季休暇には南記、潮岬、白浜の撮影旅行を行つてゐる。また全国学生写真連盟展に二点初入選のあつたことは特筆すべきである。

二十八年度の状記すべきことは物理科暗室の新設による第三代暗室の完成である。これが現在のもので、床面積、器具配置の点で第二代暗室に劣りはないが、独立のしかも本格建築にて、高校の暗室としては優秀なものである。校外活動としては、春の嵐山撮影会、夏に京都若草寺等の撮影会を行つた。また阪神高校写真連盟の幹事校として第一回撮影会と、その作品展覧会とを世話した。また春季の関西学生写真連盟展に入選多く、十三号台風による本校被害状況写真の部員によるものが県庁の参考資料として採用されること等があつた。

二十九年度は、記念祭を中心とする校内活動はもとより、校外活動では、尼崎港撮影会神戸市及び神戸港撮影会を春と夏に行い、また阪神高校写真連盟幹事校として、淡路撮影

会を世話した。関西学生写真連盟展には、春季に富士賞を、秋季には特選を得ると共に、入選作品も多く、阪神高校写真真展でも特選の外十四点の大量入選もあった。

三十年代も現在までに芦屋浜、尼崎港、宝塚撮影会等を催し、春季関西学生写真連盟展には四点、阪神高校写真真連盟展では朝日賞、特選の外大量入選をしている。

以上各年度状況を略述したが、各年毎に発展し、現在では高等学校自治会写真部として一流に位するものと考えられる。(金崎)

## 美術部

美術部活動の足跡を語るなど、何だか仲間自慢話やら、恥さらしやらに思えて心苦しい。美術部生誕とその成長発達過程の諸段階を公にしたい。

われわれは常に形態や、色彩や材質にその快きを求め、平面に(絵画的)、立体に(彫刻的)わが意を造型する、即ち純粋造型の研究や、日常生活に有用な美、即ち生活造型の研究を主眼に、各々自己の情操を陶冶し、更に人間形成を目指している一集団で、あくまで高校生として相応した活動であるより、ま

た次期社会に有用性をもつ研究を願っている。

さて美術部の歴史は幸に五回生上田雄(昭和二十五年芦高二回生)に記憶の限りを尋ねてみた。彼の入学した昭和十九年には三年生(三回生)恒吉を部長に(当時、他の部のより四、五年の生徒は在籍しなかったという)打出仮校舎東南端の二階(柔道室の階上)に陣取り、しかも殆んど自治的に練習を励んだらしく、或時は大阪天王寺美術館へ一大東亜戦争美術展の鑑賞会をもつなど働き込んでいた。しかし、かかる活動も東の間、戦争の激化と共に消えた。

さて戦後、昭和二十一年四月三回生横田守雄(戦時中美術部在籍者)が旧部員を中心に美術部を創立したが、部員少数にして活動参加も見ろべきを得ず、これもまた同年中に消え去ったとか。重ね重ねの努力を受け継いで、昭和二十一年秋、四回生高田晴年を中心に五回生田畑清一、上田雄、浅尾一弘の諸君が集會敷度をもち本格的創立を計画、石田三男先生を敷衍して本山第一小学校仮校舎にその研究を持っていた。部員も前記四名のみで、気の向く儘にスケッチ会、展覧会に赴いている。少人数にして高まるその強い息吹きは同

志も増え、研究熱も益々旺盛となり、部員総数忽ちにして三十一名を見る。秋に昭和二十二年十月、賑々とした仮校舎も漸くにして今の地、富川町に統一され、いよいよ芦中

挙げて、否、美術部においても一大活動の火蓋を切る。放課後に時を惜しむ真剣な練習会は九月中旬開かれた第二十回兵庫県小中学校絵画展にはじめて出品(三点出品可能)、相互の力を試したが、全員落選の鞭を浴びた。十一月の文化祭には、初の張切り美術展を、また顧問石田先生作、演出による「或る日の巴吾寺」という珍妙な芝居を美術部員が演じていた。興味ある一記憶だと上田雄もいっている。運動会、文化祭にはアーチ、ボスター、或は演劇のバック等の製作と、種々なる活動振り……。明けて昭和二十三年一月三十一日には、芦屋市公立中学校連合美術展が、今の市役所(全青年学校校舎)に開かれ、部員多数出品し、対外出品の最初となった。昭和二十三年四月、新卒教師で丸塚、何も解らぬ新参者の私はただ無我夢中に、教壇美術生活は始まった。同年五月、第一回芦屋市民が開かれ二年上田雄は一般作家を拂うことなく出品、見事入選の栄を得た。これが審査による対外出品初入選の最初である。更に特筆すべ

きは同年十一月二日から神戸大丸に開かれた第二十一回兵庫県小中学校絵画展に、各校推薦出品(三点まで)し、見事一年森川清が一等に、一年牧野詠子が二等に、二年田畑清



最優秀賞

け、日々その研究を広くし、年々向上の裡にその成果をあげている。

以後の主な記録のみを拾って見よう。昭和二十四年五月、第二回芦展が催され、第二代幹事、田畑清一(三年)牧野詠子(一年)の作品は堂々一般作家を圧する力作で入選激賞を受けた。十一月には第二十二回、兵庫県下小中学校絵画展に、田畑清一(佳作)牧野詠子(佳作)戸田清八郎(入選)等が勢揃いで入選した。明けて第三回、芦展には牧野詠子再度入選。秋の二科展に五十号の大作をものにして初入選、中央画壇へ躍進した。翌年の卒業学年には第四回芦展、更に二科展にも連続入選して時の話題となる。また晴れの卒業の際に芦高初の技能賞が授与され、技研の技能は賞讃された。第二十三回県展に第三代幹事、神戸喜由(三年)が「師走の街」を描いて特選の栄を、高正清子(三年)が「友達」を描いて佳作にそれぞれ力作を発表した。第四代幹事、平松栄は温厚円満なる采配を振り部内を明るく統一し、第四回芦展には広内一代(三年)が初入選を見るなど、種々なる成績を残した一年間だった。第二十五回県展には第五代幹事、梅本隆介単独入選した。田中為基は出品はしなかったが、素描力の強い

(第七代幹事)岡宏の両君が特選に、児玉隆也(現自治会長)が入選するという張切り方……。

さて昭和三十年度は第八代幹事、中川孝治を中心として大同活劇、第八回活劇に、松田みどりが未積賞を獲得して明年無鑑査となる。福田英秋が無鑑査出品、松永謙一(現二年)が初入選した。去る八月月上旬開かれた第二回兵庫県観光展には大浦達夫(現二年)が輝く朝日新聞社賞を獲得、村上徹、矢島洋三(現二年)末吉多田暢子(現一年)等の入選を見た。かかる面照を見るためには、単に拙稿のみならず、名画展の鑑賞に、或は内に外に、たゆまぬ練習会をもつ努力である。さいわい六甲山脈を北に見て、南は芦屋浜とモチーフに恵まれた環境で、足をのばせば近くは神戸港、遠くは奈良の都を巡つてのスケッチ会等々を体験し得た故だろう。

今過去八年を顧れば実に感慨無量、歴代部員はあらゆる困難を克服して、不自由な中に活動舞台を築き、年度を改めると共に、得る恵まれた環境に甘んじることなく、十二分にひろげた羽だった。その間特に自治的で、明朗な雰囲気をつくり、勉学と趣味、生活と趣味との関係を良くこなしながら進んで来たこ

とを喜んで、  
代々幹事諸君の統一力、一般部員の協力方が、一つの大きな因をなしていると思ふ。今後は一層古きを反省し、諸先輩の残した羨しい部風を汚すことなく、益々声高自治会発露のため、文化部中堅として努力することを、将来ある部員一同に願つてやまない。

### 物理 研究部

(中西)

聞ききれない名前を持つこの部の前名は、「科学研究部」である。改名したのは今年(昭和三十年)の春からであるが、その理由は同音の部とまぎらわしいからというだけなく、前々から考えられていた部の研究内容の飛躍発展に応じた結果のあらわれでもある。かつて「科研」というと「ラジオ」と考えられていたものであったが、何んとかしてもっと幅の広い研究グループでありたいというのは、ここ数年来の宿題であった。そのあらわれが真空放電とか、模型飛行機といった方向に向けられていたが、特に昭和二十六年天文気象研究部の独立した頃より、一層切実なものになった。また世の中も漸く原子力時代といわれるようになり、テレビの実用化や、

その他この部の研究対象も大いに世の脚光を浴びるに至り、一方放送部の発足によりラジオに関する事柄はそちらに譲り、自然科学の花形物理に関する基本的研究に、部員の努力を結集させようという機運が次第に高まり、今までの漠然たる名称から、その研究対象をはっきりとうたった、現在の部名に変更することになったのである。それと同時に部の活動も拡充され、新入の一年部員にも、物理の基礎事項の講義や実験を課し、新しい部の名称に恥じないよう大いに努力している。

さて「科研」時代の目星しい活躍だけを拾つてみると、先ず毎年の記念祭における会場の準備がある。しかしそのために多くの力を割かれるのが恒例であり、他の部如く平生の成果を誇り記念祭の展覧に、全力を注ぐことが不可能であったのが実情であるが、その中でも昭和二十四年の文化祭において、会場のラジオが伝える野球の実況放送と真空放電が人気を呼び、昭和二十七年には試験電波しか出してないNHKから受像機を借りて、当時芦屋ではまだ珍しかったテレビの受像を行い、会場における真空ポンプを動かしての真空放電と、体育祭当日に公開した新しい模型飛行機の妙技と共に多大の興味を呼び、昭

和二十八年には部員の努力による陰極線オシログラフを使った実験が、昭和二十九年にはやはり部員の手によるガイガー、カウンターの、苦心の研究による原子力発電機模型等がその折々の注目を浴び、しかも毎年それらはいずれもその方面の知識技能の啓発向上に多大の貢献をなしていた。

一方平常の活躍においても昭和二十六年、天文気象研究部が発足するまで、気象観測設備を本館東側屋上に部員の手によって多くの苦勞と時間を払って完成され、また前述の陰極線オシログラフや、ガイガーカウンターの完成や、その他物理教材の製作等に多大の成果を挙げ、且その都度部員のその方面における知識技能の増進に役立てている。

(若田)

### 社会科学 研究部

あの敗戦後に醸し出された様々な社会上的現象は、青年の心に、社会に対する疑問を感じさせ、問題を見出し、そしてそれを解決しようとする意欲を起させるには、余りにも十分なことであった。あの校舎の流転時代に、自分達の生きている社会に対し、何かしらの割切れぬもの、納得しかねるものを感じて、

それに合理的な解決を与えようとする意欲が生徒達の間にも起きてきたのは至極当然のことであったといえよう。「社会はわれわれの外にあると同時にわれわれの内にあるものであり、社会はわれわれの作ったものであるから、われわれ自身が社会なのである」という考えで、ある者は、政治・法律・経済方面を、またある者は、思弁的・内省的な方向即ち、哲学的分野を学んでいくことよって、自己の精神的支柱なりでも獲得しようとして、幾人かの者達が寄り集つていった。円卓会議を開き、討論を重ね、社会科学研究部なる組織を創り出し、行くためのいわば「生まれ出づる悩み」を、文字通りに体験し、克服していったのである。昭和二十二年、中村誠之を中心にして井上良信先生、岡本仁先生の御指導を仰ぎつつ同好の志が集つたが、遂に昭和二十三年に入つてから声高文化部の中に、社会科学研究部を創設することが出来た。幹事に大石立二をたて、この年には芦屋警察署、裁判所、考古学展覧会等の見学や、唯物論紹介講座を設けたりすることによつて、史学と社会一般に関することどもを総合的に研究の対象にしていったのである。一年間の研究成果として「社会の変遷展」を記念祭に催す等

社会科学研究部の基礎が着々と確立されていった時期であった。間口の広がり、社会科学の性格上無理からぬこともあった。

しかし、翌二十五年年度に入つてからは、幹事に宅見晴海を迎え「日本人民の歴史」(羽仁五郎著)や「経済学入門」(波多野鼎著)を説破していく等、目立たぬながらも着実にして、地味な活動は続けられていった。

二十六年年度——顧問に新しく小松八郎先生を迎え、荒木道美を幹事に出席をした。当面の課題となったのは、三十名余りの大世帯をもつて「如何に社会科学という広大な学問に挑んで行くか」にあった。そこで、系統的な学問を受け入れる素地を作る訓練として、身近かで且つ切実な問題と一つ一つ取り組んでいったのである。例えば、「幸福について」「虚栄について」など比較的軽いテーマについて活潑な討論を展開していった。そして、この年の記念祭には演劇の発表を試み、「処女の死」(倉田百三作)を上演した。杜研としては、型破りともいえるが、「日頃の思考する態度の訓練の結果として表われた」ものともいえよう。「身近な問題を解決する訓練から次第に系統的な学問へ」がこの時期のモットーであった。



二十七年年度——幹事、齋藤寛治、この年の記念祭には、戦後の日本経済の歩みを研究成果として発表した。

二十八年年度に入つて、川瀬博明が幹事に就任、最初の活動として、神戸大学の塩尻公明先生を部員が訪問、学生としての心構えや、また広く社会問題等につき懇談の集いを持つことが出来た。対談内容は放送部員の協力を得てテープに収め、後の例会で再び問題を発展させ、討論会を催し、予期以上の効果を得ることが出来た。また全国の著名高校社研部と意見や活動状況の交換を行い、千葉一高・湘南高校・桂高校・高津高校・長崎西高等々・全国二十三校と交流の得られたことは、社研部の活動発展の現われとして特筆すべき事柄であった。和歌山県立桐蔭高校の社研部員七名が来校し、本校部員との間に座談会をもつたのもこの年であった。この時に、近畿地区の高校社研部の連合会組織結成の話合いまで出されたのであった。斯様な活動を通して、部員の希望と自信とが、その年の記念祭に「原爆展」を発表させたのである。戦争の無意義なることを再認識して貰うべく、誤ちを二度と繰返さぬためにもこの展覧会を催しは一つの意義があつたようである。テープコ

クターを同時に使用して、展示の方法に立体的構成をもたせたのもその時であった。「社会科学の研究は、ヴァイオリンの弾き手は、まず正しい音階を作り出すことから始めなければならぬ。」このこと故に二十九年に入つてからは、もの見方、考え方の涵養に努め、われわれをとりまき社会を、正確に写し出し、作り上げ、磨き上げていくその素地として「菊と刀」(ルース・ベネディクト著)をテキストにしての輪読会を毎週の例会にとり上げていった。斯様な社会に対する洞察力、思考力及び批判力を涵養するための努力が、この年の近江絹糸の人権争議の問題を見逃す者がなかつた。そこでこの年の記念祭には「人間の権利」についての展覧会を催したのである。展覧会のための展覧は、部員一同の決して望まぬことであつたが故に、日頃の研究成果の蓄積が発表されたものであつた。

三十年年度に入つてからは、前年度の幹事、岡原太郎から川瀬博明に幹事のバトンが渡り、過去に残るも計画されながら成し得なかつた「社研新聞」の発刊を見、現在迄に三号まで出すことが出来た。日頃の研究成果を全生徒に知つて貰うべく、またそれ以上にすべてのコンクールに中野順一(七回生)の創作「石をもて追われる如く」を出品している。この年度は山田幸平先生を顧問に部員には本格派多く、多士落々の感がある。

者に「ヴァイオリンの弾き手」になつて貰うためにも、是非必要な活動であつたのであるし、それは社研部の発展史の一つの巨歩を印したといつてもよいであらう。(安田)

### 演 劇 部

部の創立は昭和二十二年、荒木闊寛、高井卓彌、高広優(何れも五回生)等が宮川に移転した頃より文化祭をめぐりて同好会を結成した時よりはじまる。この時の文化祭には「藝は天才である」を上演して演劇部の位置を高め、やがて翌二十三年には、新任の土井健一郎先生を顧問に迎えて部として認められた。その年の文化祭には荒木闊の演出で「手投弾」を発表した。文化祭後には土井顧問のアドヴァイスで規約の制定を見、例会、脚本研究会などが確立されている。現在も踏襲している二月の三年生送別会の演劇もこの年度の部員の企画のようである。

二十四年度には、土井先生が交流で転任されて、福山先生が顧問になつた。一学期に秋田雨雀「圍境の夜」を公演し、文化祭には村山知義脚色による藤村の「破戒」とつ組んでおり野心の程が覗える。岸本昌弘(五回生)に当り、古川らけついで。

二十九年年度は、連盟主催発表会に毛利和夫「子供たち」を演じ、六月中旬の改装なつた講堂開きの際にもこれを再演した。この年度はスタッフ関係の手足不足に悩みながらも文化祭にはアメリカ現代作家ポール・グリーン作「白い晴着」を公演する野心を示した。これはアメリカ南部の黒人と白人の人種問題に取材したものであるが、その特殊性が一般に理解され難かつた感がある。十一月の連盟主催コンクールには一部キャストの変更をもつてこれを再演したのであつたが遂に洩れた理由もそこにあつたのかも知れぬ。

創立十五周年記念祭をひかえた本年度は、多数の新入生部員を迎えて、充実した研究例会を主体に出発した。出費のかさむ春の連盟主催発表会への参加をみあわせ、それに代るに「芦高演劇部は全芦高生のためのもの」という趣旨から、六月下旬の第一回校内発表会実現の運びとなつた。この縁に沿うふざわしいものをということ、脚本の選択に苦勞をした。その結果トルストイの民話集のうちより脚色した「人は何で生きるか」を発表した。期末考査の発表後でもあり、月曜日の放課後という悪条件にも拘らず、予想外に多数

(の)演出で四幕十三場の大作と、四つに組んだその当時の回顧を「我々はこの大物のまゝに身震いさせ、驚きせずにはおれなかつた」と述懐している。キャストのみで実に二十名の大世帯である。

二十五年年度には、山田幸平先生が顧問となつた。阪神映画教育連盟主催の演劇コンクールに参加、二宮千尋「月牙ゆ」は優秀な成績を残したようである。他に十周年記念招待演劇大会には久米正雄「地蔵経由来」を演じ、その後は文化祭を旨として三島由紀夫「燈台」とシリング「海へ行く騎者」の練習を開始している。文化祭後、阪神高校演劇連盟主催の第一回コンクールには、新たに阿波功三郎「亀裂」をもつて臨み、第三位を獲得している。なお、寺島一朗(六回生)はそのコンクールで男優助演賞を受賞していることも特筆に値する。

二十六年度は、春と秋の阪神高校演劇連盟主催の発表会及びコンクールにはそれぞれ「序幕」と「ほどほど」をもつて参加している。文化祭には「我が家の平和」田中千禾夫「骨を抱いて」ヴァンレルベルグ「喫ぎつける人々」と意欲的な三本立公演を試みている。また、十二月にはBKでの全関西放送劇

村利明(八回生)演出により、永野稔「修学旅行」をもつて参加し神戸女学院・県立西宮高校と並び優秀三校のうちに入選している。文化祭には山田時子「良縁」とユニークな劇風の真船豊「鈍」をもつて臨んだ。十一月の連盟主催コンクールにはキャスト、スタッフの一部変更をもつてこの「鈍」を再演したが遂には洩れている。

二十八年度は、記念祭直前に襲つた台風十三号のため講堂に大被害を受け、文化祭の開催すら危まれたが、演劇は精進小学校の講堂を借りて、とことこおこなう行われた。これには浜田善彌「願」と木下順二「三年漫太郎」の怪妙な民話劇を演じ好評を博した。春の連盟主催発表会に公演した阿木翁助「長女」は練習不足のため遂に洩れたが、秋のコンクールにはこの「願」をもつて参加、三位に入賞した。なお、この作品で鈴木省三(九回生)が演技賞を受けたことを記しておく。この年度は山田先生病氣休職後、熊谷先生顧問の任



の観客をえた。また、こうしたゆきかたが大  
多数の芦高生によって支持されているとい  
うことが、その際とつたアンケートの整理に  
より明らかになり、今後の演劇部のありかたに  
参考となる資料を提供してくれた。高校演劇  
における演出、演技のありかたには、なお多  
くの問題がある。しかし、劇を演ずる楽し  
さをただ観客層を喜ばすことに向けるでは  
なく、高校生らしく、作品を文学として、美  
術を絵画・音楽として、演技を人間探究とし  
て真剣に学ぶ態度のなかに見出すことをいつ  
も念頭において練習しようとした。あと旬  
日に迫った文化祭には、高校生に取材した左  
々俊之作「若年」を公演する予定で練習に励  
んでいる。

(古川)

## 映画研究部

映画に深い関心を持つものが集って同好会  
を作ったのは、昭和二十二年の末であった。  
その存在はささやかで、二十三年秋の記念祭  
にスチル膜を開いて、その活動の一部を示し  
た。

二十四年には自治会の部として発足し、部  
員約五十名を擁し、積極的な活動を始めた。

## 化学研究部

化学研究部といえは余り華やかな部ではない  
し、またはたから見てそんなに面白いように  
も見えない部である。殊に化学なんか苦手だ  
という連中にとっては、あの臭いの漂う実験  
室で煮たり、焼いたり、洗ったり、時には新  
調の洋服に穴を明けたら、親から授けた大切  
な身体八膚をも傷めかねないあの実験を何と  
好んでごそごそとやっているんだらうと思わ  
れるかも知れない。

しかしながら知る人ぞ知る、わが化研は高  
校の化学研究として決して恥しくない業績を  
残しており、現在も頗る活発に活動してい  
る。しかもこの化研において、化学実験の何  
たるかを知った者にとっては誠に興味つきな  
い仕事となつてしまつたのである。そこには長  
い、いはらの道があり、また見晴しのよい丘  
にたち、しばしその前景にうつとりとする時  
もある。そして遂に山上を征服した喜びにも  
比すべき完成の輝きも。勞して得られた成果  
こそ誠に意義深いものと感ずるのである。そ  
こでは不断の探求と、注意の集中を必要とし  
る。このようにたくましい精神力をきたえあ  
げる化研部員こそ誠に頼もしいとまずは自讃

部内においては毎月例会を開き、映画批評、  
研究等を行い、「フィルム・マンズリ」「ス  
クリン・ガイド」を発行して部の充実を図  
り、一般には優秀映画を選んで団体鑑賞を催  
し、その都度鑑賞手引を作成配布して、鑑賞  
の便を図ると共に、映画鑑賞指導の一役を勤  
めた。映画館における団体鑑賞はその後総て  
映研の手で行った。この年には全校鑑賞回数  
を含み十二回の団体鑑賞を催した。視覚教育  
を進め、波に乗って鑑賞参加者の数多く、「ハ  
ムレット」の鑑賞者は七〇名に上つた。映  
研主催の映画会(「野球狂時代一他」)を講堂  
で催し、記念祭には華やかなスチル、ポスタ  
ー展が人気を博した。

二十五年には映研主催の映画会を芦屋会館  
で催した。映画は「戦火のかた」であつ  
た。秋には前年同様スチル展を開いた。  
その後の部は大体以上の活動に做つた。生  
徒数の増加により、全校対象の団体鑑賞は不  
可能となり、希望者のみの団体鑑賞となつ  
た。団体鑑賞は、部活動の主なものであつた  
が、後には団体鑑賞の利用者は少くなり、部  
員も減り、活動に精彩が乏しくなつた。しか  
し記念祭にはスチル展を繞りて開いた(二十  
八年、二十九年)。映画会を主催することも

部の重要行事として毎年計画しながら、種々  
の障壁のため果せず、執行部と共催の形で  
「女だけの都」(二十七年)、「大音楽会」  
(二十九年)を記念祭に上映したに止まる。

以上の活動から映研は「プレイガイド」  
「割引券の発行機関」「映画社の宣伝係」的  
存在であると思はれるのも尤もであり、部と  
しても映研の現状、活動をいさぎよしとせず  
映研らしき映研、総合芸術である映画と真剣  
に取り組む研究する価値ある存在たらしめよう  
とする動きはありながら、部員の多くが映画  
の知識に乏しく、予算の制約もあって、従来  
の活動以上には出られなかったのが実情であ  
る。

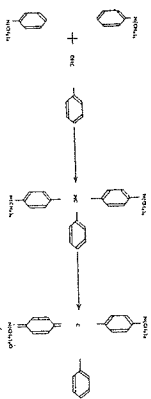
二十九年には団体鑑賞を引締め、真に優れ  
た映画のみを映研推薦の意味で団体鑑賞を行  
つた。他方比較的鑑賞の機会が少い文化映画  
の映画会を企画したが、予算の点で独立して  
出来ない事情にあつたので記念祭に、歴研、  
生研と共催で文化映画「いねの一生」「中尊  
寺」等数篇を上映して計画の実行を見た。学  
年末には機関誌「映画研究部報」を発行し  
た。これは部活動の沈滞を破り、部活動の前  
進を示したものである。真に映研に相應しい  
充実した活動は今後に期待しよう。(深井)

する次第である。さて、それでは化研創立時  
代の御苦心を九茂先生よりお伺いしよう。

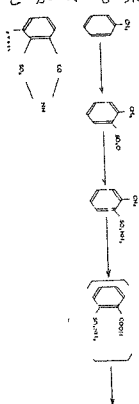
「昭和二十四年春、私が芦高へ赴任して来た  
当時は、今の理科教室はまだ使用出来ず、器  
具なども倉庫に詰込んであつたが、出して見  
ると、高校教育に不適当なものが多かつた。  
もつともこれらは戦後購入されたもので、当  
時は品物も無かつたので無理もなかつた。し  
かしともかく二学期から化学研究部を創らう  
ということになり、山本博、岡野孝一(共に  
五回生)等、十数名の熱心な部員が出来た。  
ところがその頃は参考書もなく一体どうい  
う風に行つて行けばよいかわからない。そこで  
私は、定性分析をやつたら高校生として一番  
化学の力がつくし、また大した実験器具もい  
らないと思つてプリントを刷つて、それによ  
つて実験を始めた。幸い部員は非常に熱心で  
真面目であり、山本博は優秀賞をもらつて卒  
業し、阪大へ入学、引続き井坂秀夫(六回  
生)や、女子の田付節子(六回生)など優秀  
な部員が引続き、井坂も優秀卒業生として東  
大へ入つた。その後だんだん設備も参考書も  
そろつて来て、部員の研究欲を刺激し、益々  
盛んになって来た。化研は地味な部であるか  
ら、部員はじっくり勉強することが好まし

い。幸いこの伝統が受けつがれて成長してい  
ることはまことにうれしと思ふ。今後益々  
この風格を育成して、優秀な部員のもとに統  
くことを希望する。先生のお話の如く出発し  
た化研ではあるが、現在ではまず一通りの実  
験器具をもち、在籍部員七十五名、奨励部員  
は常に三十名を下らぬという状況にまで発展  
してきている。ここで簡単に成果の一部を列挙し  
てみよう。

トリフェニルメタン系色素の一つであるマ  
ラカイトグリーンを志田、滝川(共に八回生)  
の両君が製造に成功。



また製造工程のかなり難しいサッカリンを  
田中(八回生)が製造に成功。



また高校生としては珍しい、醋酸ビニールの合成を手掛けた東鬼（九回生）山野（十回生）両君等譯にその意気たるや盛であった。

$CH_3CH_2CH_2COOH + CH_2 = CHCOOCH_3$

鹽酸（ハロゲン）

その他太田、島田（十回生）両君のズルチン、実験熱心で有名だった岡本の味の素や、アスピリン等の研究がある。その他毎年、ケミカルガーデン、人絹、合成繊維、化粧品等の製造を行い、週一回更に高度の化学の講義等を開き和やかに活動している。なおわれわれ化研として阪神間にその名を誇る芦高に恥しくない実験室が一日も早く完成されるよう希望して止まない次第である。（谷川）

## 数学 研究部

昭和二十三年六月中村政一先生（現尼崎北高校）御援助の下に高井卓彌、岡村純一、赤松弘通、後一雄（共に五回生）等の努力で自身の数学研究が結成され、数学を愛好する熱心な會員の研究発表会が週二回の割合で開かれた。翌二十四年四月新学年を迎えて創始者高井が文化部幹事会で校友会の部として認められるように非常な努力をしたが、十四対

十三で否決された。しかしこの事によって会の団結はかえって固められ、中村先生による微分積分学と多田先生による解析幾何の研究が行われた。翌二十五年には前年度の熱心な活動が多の人々から認められ、幹事、井阪秀夫（六回生）の下に自治会の部として発足し、週三回の研究会が持たれる事になった。

しかし六月には中村先生が転任され、その後を継がれた乾先生も御多忙のため、二学期から三木先生が顧問となられる等多難であったが、その間、竹内端三の本によって微分積分学の研究が続けられた。当時研究に参加していたのは殆ど三年生ばかりであったし、乾先生の転任もあり、二十六年度はその前途を危ぶまれたが、顧問、多田先生の下、新幹事、高木（七回生）等の努力で新入生も加え、上級生は渡辺探三郎の本により微分積分学（新堀）、下級生は統計学（多田先生）の研究が始められた。

またこの年、初めて文化祭に参加して各種の展覽を行い、神戸新聞、タイガー計算器の見学も行った。翌二十七年度は引き続き顧問多田先生、幹事は大隅真（八回生）で解し及び解析幾何の集會が持たれた。この年も前年に準じて文化祭に参加したが、更に図書館を新

食物研究部が発足した。

最初設備、予算共全くなく、十余名の部員は、水道だけ引かれた臨時家庭科室で多くの不自由な耐えながら栄養理論、調理実技の研究等に真剣に努力していた。

二十五年になつて新入生を迎え、部員は三十名近く増加し、講習会、研究発表会等も開催、漸くその歩みは軌道に乗りはじめて、今年の冬も終った。実習室はこの年秋に完成し記念祭パザールに於ける食研の活躍はめざましいものがあつた。又神戸の製パン工場や、大阪の生活科学研究所の見学も行い、多くの收穫を得た。二十七年、家庭科の設備が漸次ととのうにしたがって研究会も増え、少数ながら、備品も出来て部の発展への土台は少しづつ固められて行つた。入部希望者は増加し総員四十二名になつて、部の統一には相当苦勞もあつた。夏は休暇はじめに豊後ヶ丘の日本醸造工場の見学を行った。更にこの年の夏の全国高等学校野球大会で、本校が優勝の栄冠を勝ち得たことに際してこの食物研究部全員協力一致しての大きな献身があつた事は忘れられない。

二十八年は、研究実習も度々実施、同時にテールマナーの研究、会員全般の研究等

と部員の実力が養成される機会が多かつた。

春夏の両野球大会合宿には、選手の間、食事一切を担当、設備のわるい公食堂で散々苦勞したが、これもよい体験の一つとなつた。

記念祭パザールはこの年から自治会と一本化しその方面への尽力が大きくなつた。三月には卒業生を交えて、西宮明治乳業工場の見学を行った。

二十九年、部員三十七名になり、定例の研究の他は夏休みには有志で各運動部の食事担当の奉仕をした。パザールが自治会下に属して二年目、食物研究部の活躍が一層期待されるようになり、部員の活動は自主的になつた。十一月には一流料理店の調理室見学を兼ねて西洋料理正餐のテールマナーの実験を学ぶために、有志が大阪の平野屋レストランへ行つた。これははじめの試みであつたが非常によい経験であつたと思われ。

本年度は部員三十五名、例年の活動を活発にして半ばを過ぎた。更に後半には大きな行事をひかえて、現在その準備に余念がない。回顧すれば、食物研究部発足以来ここに六年、歴代幹事や、部員達の並々な努力によつて育てられた成果は今、大きく実を結びつつある。今後の発展を更に期待してやまな

たに購入し部員に貸出を始めた。また校外活動として、豊岡高校の教研と連絡を持った。

二十八年度は顧問多田先生、幹事、會和憲雄（九回生）で例会の他に測量器具の研究をして、各種の測量を行った。記念祭には二次曲面の模型を作製出品し、他に懸賞問題を出して、一般生徒から解答を募集した。

二十九年度から顧問を新堀が引継ぎ、幹事田村秀夫（十回生）で三年生諸君による下級生の解一の指導と、全員により「教小学小景」等の靈物から面白い問題を取り出してお互に研究を行った。

また、初めて機関紙「パラドックス」を発行して研究を発表した。本年度は皆川が幹事で例会を開いており、一学期に「パラドックス」二号を発行し、引き続き三号を出す計画を立てている。また昨年度まで第三職員室においてあつた教研の図書館を執行部室に移し、部員を初め一般生徒の利用を希望しており、更に生徒の利用出来る数字書を集めたいと思つている。（新堀）

## 食物 研究部

昭和二十三年、共学実施以来女生徒の活動が次第に活発化し、翌二十四年文化部の中に

と部員の実力が養成される機会が多かつた。

## 被服 研究部

被服は生活の三要素、衣、食、住の一つである。これは日常身につけ、その人の個性を現すもので、他人に快い感じを与えるように、自身で創意工夫しなければならぬ。又、花を飾るとか、裝飾物を置くとかいうような室内裝飾によつて、私達の情操を高める為にも、一寸した手芸などは是非心得ておかねばならない。しかし、学校の授業では、授業時間や進度の関係もあつて、自分のやりたい事もやれない場合が往々ある。ここに被服研究部を設置する必要がある。まず同好会として発足したのは昭和二十四年の春、男女共学が実施せられた翌年であつた。当時女生徒は一年生約百五十名、二年生約四十名、三年生は僅かに十数名であつたが、一年の間に約三十名の會員を獲得し、翌昭和二十五年の春には、自治会の部として正式に承認せられ、ここに被服研究部は、松岡道子を幹事に、會谷先生を顧問に置き、予算九千五百円を以て発足したのであつた。そして先づ、夏休みに、芦屋の甲陽幼稚園で、ローケツ染の講習を受けて、テールセンターと手提カバンを

作り、記念祭の展覧会には全員出品した。又  
部員以外の希望者も募り、ペンテックスの  
講習を行い、秋の記念祭にこれらの成果を集  
めて、新しい新館で、部員及び被服選択者の  
作品展覧会を持ち、バナーをも行つて、従来  
は男子中心であった芦高自治会活動に、花や  
かな色彩を加え、男女共学の意義を一段と強  
化した。又、当時制服がなかったため、被服  
研究部でよい制服を作らうと研究したが、こ  
れは未完成に終つた。

かくして発足第一年は終り、昭和二十六年  
度の新幹事、小林みち子に引継がれた。この  
年は専ら歴史の浅いこの部の内容充実と努力  
し、昨年に引続いてローケツ染の講習会を行  
い、更に又、マクラメの籠、ビニール手芸、  
刺繍、レース編、造花等、種々の講習会を開  
き、放課後に、休暇に、熱心に研究を励み、  
その他図書を購入し、デザインや色彩の勉強  
をする等、多方面に亘り、着々と発展充実し  
て行つた。廿七年には、自治会予算も一万二  
千円に増額され、高橋保子新幹事の下に、内  
容の充実強化を図つた。二十八年からは曾  
谷先生が茶道部の顧問に転ざられ、新に山本  
が顧問を引受け、幹事は佐々木輝子に引継が  
れた。そしてこの年は毛糸で作るアクセサリー

ーをはじめ、ビニールアクセサリー、フラン  
ス人形、毛糸機械編等新しい方面を開拓し、  
又ローケツ染も行った。かくして、新生面を  
拓きつつ、内容をも着々と固め、常に三十名  
前後の部員を擁して、熱心な地味な研究を続  
ける一方、毎秋の記念祭の展覧会には、全部  
員の労作を発表し、花々しい活動を続けてい  
る。

かくして、二十九年度は山ノ井奈々美、三  
十年度東山美恵子が幹事に就任し、よりよい  
衣生活、より合理的な衣生活という目標のも  
とに全部員はたゆまぬ努力を続けている。

## 書道部

(山本)

現在の書道部は昭和二十五年年度に、書道同  
好会として発足し、その後をうけて出来たも  
ので、満五ヶ年の歳月を経ている。一口に言  
うと搖籃時代を過ぎ着実に成長し、今後の発  
展に大いに期待して良いという段階にあると  
見て差支ないと思う。

野村の着任した二十五年四月は学制改革の  
余波を受けて、学校全体に落着もややどしく  
現在のように整備された環境にあるでなく、  
書道の授業は勿論、クラブ活動するようない

催、部員並に有志多数出席、席上片山先生の  
揮毫ぶりを拜見。なかなか盛大であった。向  
当時書道雑誌「洗心」に「書芸公論」  
「正筆」等を購読し成績の向上をはかってい  
た。練習室も旧図書室隣であった。  
二十七年年度(幹事、植田豊雄)には芦屋書  
道研究会とタイアップして、研究会場を芦屋  
公会堂、西宮勤労会館へと移し、書技の錬成  
と他高校への呼びかけに主力を注いだ。文化  
祭は前年と同じ教室で、前年度以上の力作多  
数出品した。主体性は書道部にあったが、一  
部部員外の作品も陣列した。

翌二十八年年度(幹事、五十川一夫)は部員  
団結し地味な勉強を続け、実力の蓄積を主眼  
に、前年同様、校外進出の機会をねらつてい  
た。他高校書道部とも緊密な連絡をとり、健  
全な発育ぶりを示していた。錬成会を三回開  
催。西宮市民館での書初展にも出品好成绩を  
あげた。

二十九年度(幹事、太田圭一)は書道部始  
つて以来の逸材揃い、部員男女計四十数名を  
数え、部員の親睦団結もいよいよ堅く、積極  
的に動き、内外に見るべき成績を残してい  
る。文化祭には部員作品はもとより、他高校  
の招待作品、有名先生方の賛助出品を展覧し

如何にも展覧会らしい雰囲気を作つた。又、  
一月には阪神高校書道部連盟の結成をみ、第  
一回展覧会を朝日新聞阪神支局後援のもとに  
本校講堂に於て開催、学校賞其他を獲得。  
その他各種団体の展覧会に出品、相当の好成  
績を収めている。(芦高八号参照)  
本三十年年度(幹事、中村智枝)に入り、六  
月初旬、精小に於て芦屋市展の書道展に約  
四十点出品。又書道部の現役とO・Bを結ぶ  
有意義な会合を度々持ち、努力している姿に  
は心温まるものを覚える。なお最近では部が  
主体となつて近畿の各高校書道部に呼びかけ  
ている。

今後部として研究すべき問題は

(一) 折角入学し優秀な技能を持ち書道部に  
籍を置きながら、大学入試、就職試験、他部  
兼部等の為、三ヶ年間つづかず脱落して行く  
者の取扱ひ。

(二) 部員以外で正規の授業による優秀者の  
作品の展示発表の機会——部主催の書初展、  
校内展開催の計画。

(三) 現代書道界の趨勢。古典か前衛かとい  
う問題。

(四) 硬筆書道の取り入れ方々々である。  
以上のような短日月の歩みではあるが、研

切の準備室等の設備は全くなく、我々乍ら情な  
く思ったことが何度あったかわからなかつ  
た。それにも拘らず、旧制度最後の武村達雄  
中村克巳、竹内郁の諸君等が野村に「先生、  
書道部を作つてやりましょ」との申出があり  
、それは大変結構なことだと早速同好の士  
を募り、今の一三一号教室で二週三回集り  
和気藹々の中にも遅くまで熱心に練習会を持  
つた。その年の文化祭は幼稚ではあつたが、  
クラブ全員と書道選択者の全部の成績を条幅  
半紙等まで出品した。今の二二八号教室で  
あつた。

二十六年年度(幹事、武村達雄)は正式に書  
道部として認められ、予算五千元(今思うと  
随分遠慮していたものだ)をもらい、部員も  
増加し(上手な生徒も沢山あつたが、他部の  
兼務者も入部していたようだ)書道界の元老  
片山万年先生を数回お招きし、講習会を開き  
大いに蒙を啓いた。文化祭最後の日に先生を  
囲み、本校先生方と、部員との楽しい座談会  
をやつたのもこの時であつた。この会場は三  
二四、三二五の両教室で極くいい作り紐をわ  
たし作品を掛け、立派な飾付をやつたことを  
憶えている。尚翌年一月成人の日に阪神間高  
校書道部の作品鑑賞会を本校図書館に於て開

究するに畫稿、筆硯の置く所すらなかつたあ  
の当時に較べ、今や南館二階東側に書道教  
室、芸能準備室が出来、安住の地を得たわけ  
だが、全く願ひも隔世の感に打たれる。  
幸い、部員諸君の精進と、団結と相俟ち今迄  
の基礎の上に脱皮を重ね、今後ますます発展  
して行くことを信じてやまない。(野村)

## 華道部

文化部の一部としての華道部は、現在四十  
二名の部員をもち、毎週木曜日、小原流家元  
教授田中光可先生の御指導のもとに励んでい  
る。

その発展をかえりみると、本校が芦屋高等  
学校として発足した昭和二十四年の六月より  
小原流華道部を創設し、傍島和子、藤本良子  
大野晴子をはじめ、現在の幹事八島かつ子等  
が活躍、毎年の文化祭には華道部一同の力作  
を展覧に供し、終戦後の華道界の大改革に伴  
い、道具も新感覚に合うものを購入し、過去  
の型の模倣、手法の習得から、現代に生きる  
若人として、自己の感覺表現の華道の使命の  
達成の為のあゆみを続けている。

終戦後年と共に、我國の華道はますます盛  
んとなり、西洋美術を取入れた前衛挿花が創

造されたが、まだ一般化されず、一部の指導者による会場芸術として行われているに過ぎない。従来小原流では盛花、瓶花を通して自然本位と色彩本位の手法を取っており、戦後新しいいけ花の分野が開拓され、過去の自然謳歌の写実的な自然の風致景観を描写する自然本位の手法と、花材の色彩的効果を強調する色彩本位の盛花に区別して研究をしてきたが、現在は更に新しい、いけ花の発展に伴い従来の写実傾向と、所謂異質素材を取り入れ新しい感覚を表現する非写実傾向に大別され従来の直立型、傾斜型、下垂型の花型に直立型、対称型の二つの新しい花型が創造され、一層多彩になり、華道界の一時の混乱期より脱した現在の歩みに伴い、部員も着実に自己の感覚の向上をめざして、今後の発展を期待しつつ精進している。(佐藤)

## 茶 道 部

二十三年男女共学が実施されてより茶道部の必要に迫られ、二十五年六月より非常に御立派な山崎つや先生をお迎えして、週一回本校の作法室でお稽古を始めた。

当時は二年の女子四名、一年の女子十三名ぐらいのものだったが、後二年の男子二名が

お稽古に加わった。しかし現在では三十名近くの部員になって、お稽古も週二回になった。この外にお茶室、お庭等の拝見にいたり又、お抹茶の歴史等研究している。学課のかわら時にはゆくりと、日本古来の茶の湯のお稽古をする事によつて、女らしい情操を養うのも有意義であり、又、日本古来の立居ふるまいを学ぶのも、日本人として大切な事であると思う。(魚崎)

## 天文気象部

沿源は科学研究部(現在の物理研究部)で科学研究部員中、天文及び気象により多くの興味を有するグループがその研究を続けていた。所がグループ員数の増大に従い、充分な自由な研究活動を為す為、独立の部を創めようと、先づ昭和二十五年年度に科学研究部の中で天文気象班を設け、翌二十六年年度に文化部幹事会で独立の部として承認され、ここに天文気象研究部が発足したのである。

それ故、以前から神戸海洋気象台、その他に見学の度を重ねていたが、改めて気象台の指導下に、地学科と協力して露場を本館東屋上に建設した。それは、部員の手により、土

砂、レンガ、セメント等をバケツ等で屋上まで運び上げて仕上げたのだった。以後観測を続け、各種の日記計及び器具を順次検定済に切替ると共に、その数を増し、やがて規模及び精度から芦屋観測所として一年三回の定時観測を行つて、月に資料を県庁へ報告、気象月報に連載されたのである。

二十七年には定時観測をして県へ報告する外、風力塔に気象標識旗を取付けて標識を行うと共に、気象黒板を新作して、気象協会作製天文図の記入を始め、芦高生の關心喚起に努めたのである。更に太陽黒点観測と接近時の火星連続観測を行つている。

二十八年度には、従来の定時観測を続けて県へ報告すると共に、夜を徹しての台風観測を屢々行つた。所が十三号台風襲来のため風力塔が倒壊し、ために観測所としての完全な機能は失うに至つた。以後本館改装の案と共に再建が遅れたので、県への報告は取止めざるを得なくなったが、部活動としては、残存器具による観測を続けると共に、旬日に亘る気温日変化観測、或はラジオ放送による資料に基づく天文図作成練習を行つたを続けた。

二十九年度初めは、昨年に続き残存設備に

よる観測と、天文図作成を行つたが、本館改修のため露場が撤去されるに及び、測は全面的に中止の已むなきに至り、未再建のまま今日に至つてゐる。唯、校内放送の天気予報に僅かに面影を残すのみとなっている。

天文気象部としては、観測が中心であるために露場、風力塔等の設備が絶対必要であるが、気象台との関係もあり、如何なる規模基準で再建するかを研究中が現状である。(金崎)

## バレエ、ダンス部

同好会として出発したダンス部が、幾多の先輩諸師の努力をもち、文化部の一部として認められてから四年、その間毎年十五名足らずの部員が設備のない悪条件をかえり見ず基本練習に、創作にと頭張り、年毎に良き作品を残して行く努力には全く敬服している。

詩的感興が頭に浮ぶ時、それを言葉や文字をかりて詩を作ると同様、それを肉体の動きで表わされた場合はダンスとなる。このようにいって他校と異り、文化祭等の作品もすべて部員(生徒)だけの力で少しでも良い作品を努力を凝らして来た。他校と競演するのでもなく、年々の目標は文化祭となり、従

つて夏休後、九月の雨と共に急に元気が出、苦痛に思われている練習も楽しみに他ならぬものになつてしまふ状態である。二十七年以降に創作した作品は

二十七年 文化祭：玩具箱・蝶・

ロザムンデ舞曲

二十八年 送別会：親指姫・別れの曲

同年 文化祭：人魚姫

二十九年 送別会：森の水車・芦笛の踊り

同年 講堂落成記念：ライムライト

同年 同窓会：ライムライト・

赤い風車

同年 文化祭：みにくいあひるの子

三十年 送別会：ベルシヤの市場・

ひき潮

同年 同窓会：ラッパ吹きのワルツ

と多くの数になつてゐる。これら演じる際普通では調達しにくい衣裳も、山田先生の御紹介で毎年苦勞もなく借りる事が出来、部員も感謝しつつ、その年々の作品の完成へと精進する事が出来た。

今までの作品は、取組み易い関係もあり、物語を中心に創作して来たわけであるが、これからのバレエの一つのジャンルとして物語を持たない抽象的なものに発展させて行き

たいと思つており、そしてバレエという広大な深遠な芸術に向つてなされる小さな、けれど一杯の努力―自分達の力以上の事を試みんとする努力、たとえそれが空しく終ろうともそこには努力した者の進歩があるのではないかと思ふ。(水上)

## 史学研究部

史学研究部が文化部二十有余年の末尾に始めてその名を運ね得たのは、僅々一昨年の事ではかない。正しく歴史なき歴史部とでもいふべきか。

然もこの部の性格として、校内外両面に対して、殆ど活動成果を顕示する手段も、物証も持つ事を得ず、果てなき道を只管に低迷しつつ、定かならぬ足跡を刻して現今に到達したのがその実情である。

然し乍ら、唯徒らに年を聞きたるが故に貴からず、機構の大なるが故に重からず、将又成果絢爛たるもののみが活潑たるには限らざる事自明の理であれば、たとえ史学部が未だ歩み危かしき幼年期にあるとしても、少くとも老いの練習がその日暮らしの手段であるもの位には何等恥かしめらる可き理由は無いであらう。此の歴史浅き史学部の記録は従つて、

史学部自身の向後への指針たらしむるためのものとしてこそ當を得よう。

現在の史学研究部発足は昭和二十八年乍らそれ以前にも歴史研究が一時試みられた頃があった。聞くに依れば、昭和二十四年頃、社研部がその研究活動の内容に歴史・考古学等を包含し、考古学展の見学などを試み、随時史学研究も併せ行った模様である。しかるにその後、社研部はその本来の研究部面のみで専念する事となり、歴史方面の研究は消滅した如くで、従って現今の史学部はその源流を此処には求め得ぬままに終った。

史学部誕生の前提は、昭和二十七年十一月十四日発足の史学同好会発足による。当時、二年生であり考古学に非常な興味を有して、個人的にその研究を行っていた石井成夫が、同好の有志を糾合して史学同好会を結成した。会員は当時の二年生のみ十余名、その活動は主として考古学方面の基礎的な知識の学習と技術を習得する事、及びその実習としての阪神間の遺跡踏査であった。翌二十八年三月十三日、史学同好会は二十七年度記念行事として、「尼崎遺跡巡り」を行い、尼崎市役所の援助を受け、阪大史学研究室員の指導を得て、尼崎市内の各時代遺跡を終日見学し有意

義なる終末を飾った。

二十八年四月、文化部幹事会は、史学同好会の活動を認め、その希望を容れて文化部の一員としてその新設を承認し、此処に三年石井成夫を幹事に、前嶋が顧問となり、史学研究部が誕生する事となった。

発足初年度の活動内容は、同好会当時の例会を週一回に固定し、随時史蹟見学なども試みた。特に当年より毎年夏期休暇を利用して史蹟見学旅行を行う事と取決め、その夏は八月十二日・十四日の三日間「播磨丹三地方史蹟巡り」を遂行した。尙当年より毎年「正倉院展」見学も史学部が輪流する事とした。初年年々たる研究活動推進の中に文化祭を迎え、史学部は二二五号教室を特に懇望して非常な熱意を以て、当部第一回の文化祭展覧会に参加、「日本史料展」を開催した。而もそれは予期以上の豪華なものとなり展示品は二二五号の大教室に充滿し、なお場所狭隘のため一部陳列を断念した次第であった。その内容は考古学遺物を主とし、以降各時代の、然も阪神地方関係の文書史料等、日本史研究並びに学習上至って価値高き物であって、国宝重要文化財等の貴重な品も多く、新聞にも報せられた。従って阪神間各校より

の見学はもとより、神戸大学の研究室より史料研究に來校を見たり、「史料展覧目録」を二、三の大学から要請されて送付した次第であった。

斯く第一回は阪神地方の未発掘の貴重な史料を学界に紹介するという予期以上の有意義な成果を得たのであった。

尙、春秋を主として行つた史蹟見学は、部員一同の意向として「史学部は部員のみの中に止まる事なく、常に高校生と共にあり、全員に奉仕すべきである」とし、毎度校内に掲示して希望者は部員以外も参加を許し、発足頭初の僅少な予算も非常な価値を發揮した訳である。

会に登呂遺跡模型作成として発表された。此亦、代表的展示会として毎日新聞紙上に紹介され好評を得た。なお史蹟見学に奈良方面各地、史蹟踏査に阪神各地、考古学実習も再三、と研究活動は感々活況を呈した。

事、石井成夫を中心に会計、書記等組織を完備し、部員の自主的運営によって益々其の活動を推進した。毎週の例会には古典の輪読会を実施、古事記をテキストに神話と親しみ、傍々「歴史新聞」を発行、尙研究雑誌も計画している。夏期見学旅行は倉敷を中心に「山陽史蹟見学」とし、重ねて中甸、大和地方

を訪れた。文化祭及び、研究雑誌に発表のため、此等は現在整理中である。

歴史浅き史学部が質的に、飛躍的な発展を示した業績を認識し、今後一層の発展を期したい。(前嶋)

◆校内出版物一覽◆

誌名	編集者	創刊年月	継続号数	刊行部	発行部	部員	創刊号
パンタグラフ	鉄道研究部	二二・四	五三三	丸馬車	丸馬車	丸馬車	二二・三
最新、壁新聞	「校友新聞」として			心之糧	復刊あしたづ	三年昭和二十五年(昭和二十八年度)	二二・二
出だ、まもなくガ	五号から活版の			かたつむり	文芸部	一年学年主任会(昭和二十八年度)	二二・一
第二号から一	高新聞」となる			考える葦	メルヘン	メルヘン同人	二二・二
テッド・ニュース	鉄道研究部	二二・八	三三三	メルヘン	歴史新聞	歴史研究部	二二・六
あしたづ	二年(昭和二十二年)	二二・一	七	歴史新聞	図書部	史学研究部	二二・六
葦の譜	三年(昭和二十二年)	二二・二	二	図書部	生物学部	生物学部	二二・七
花火	文芸部	二二・九	九	生物学部	数学研究部	数学研究部	二二・九
窓	弁論部	二二・三	三	数学研究部	社会科学研究部	社会科学研究部	二二・二
が	生物学部	二二・三	二	社会科学研究部			二二・二